

Report from the **FD** salon

05-1

龍谷大学 FDサロンレポート

アメリカのリベラル教育は死んだのか？

トム・ライト Tom Wright (経営学部教授)

2005年6月7日(火) 於／深草学舎〈紫英館2階南会議室〉

リベラル教育が死んでいるのか、生きているのか、を議論する前に、所謂「リベラル教育」とは何なのかについて話さなければならぬと思います。

言葉の意味から「liberal」教育はどんな教育か考えてみれば、英語の liberal という言葉は形容詞です。13世紀のフランスでは、気高い、寛大という意味を持っていたそうです。別な意味合いでは、奴隷に対して「自由人」free man という意味でした。

その後 art(s) を形容して、(seven) liberal arts という言葉が出来ました。それは *trivium* 文法、論理、修辞(又は弁証法)と *quadrivium* 算術、幾何学、音楽と天文学です。七つのリベラル・アーツを勉強する目標は、実用的な目的でもなければ機械的でもなく、知性を拡大するということです。^{※1}

中世には liberal は自分中心で、欲望を放逸させるという意味合いでした。しかし啓蒙時代(17-18世紀)に積極的に、寛大な、あるいは偏見から自由になるというような意味が復興してきました。そしてアメリカの植民地時代にも積極的に使われてきました。(※現在のアメリカでは、むしろ中世時代のように、否定的に使う人が多いと思います。特に否定的に使うのは今のネオコン政治家とファンダメンタル・クリスチャンの人々です。)

To liberate は人間を自由にする事です。簡単に言えば、自

分の無知、偏見、コントロールできない感情からも自由にさせてもらえるのが liberal education の理想でした。「何を」自由にするのかと、「何から」自由にするのかという事を良く考えなければなりません。後半でそういった事について詳しく話したいと思います。

ヨーロッパの中世前期

よく暗黒時代と言われている、物質的にも、文化的にも、知的にも、やはり暗い時代だったのではないのでしょうか。ローマ時代からの道路がだめになって、交通が非常に不便な時代で、ある街が衰えて完全になくなってしまいました。その時代の教育はローマ教の cathedral church schools で行われましたが、内容は聖書を読みながらお祈りをしたり、瞑想したり、どうやって死んでから天国に行けるかが勉強の中心でした。自然、科学、文学、哲学などに関する好奇心は大分押さえられていました。価値ある勉強は神様やキリスト教(ローマ教という意味で)の教義、教理だけしかありませんでした。ほかの勉強は全部虚栄やサタン the Devil の仕業でした。中世後期(1000年以降)には、ローマ教は少しずつ、教義以外の学問も許容してきたと言えると思います。そうでなかったら、いわゆる経験論や科学的推論や科学的研究法は育たなかったでしょう。

※1) They are called liberal (Lat. *liber*, free), because they serve the purpose of training the free man, in contrast with the *artes illiberales*, which are pursued for economic purposes; their aim is to prepare the student not for gaining a livelihood, but for the pursuit of science in the strict sense of the term. *The Catholic Encyclopedia, Volume I, 1907, Robert Appleton Company.*

アメリカの植民地時代

アメリカ革命以前にイギリスにあった大学を真似しようとした大学が八校ありました。Harvardを始め、William and Mary、Yale、University of Pennsylvania、Princeton、Brown、Rutgers、Dartmouth大学が次々に出来ました。大体、当時の大学の目的は一緒でした。(1)市民のリーダー civic leaders の養成、そして(2)キリスト教教職者 clergymen の養成です。(もちろん、全ての大学はプロテスタント派の大学に決まっています。一番最初に出来たカトリックの大学は Notre Dame でした。フランス語を話す八人の Brothers of the Holy Cross がインディアナ州で設立しました。)一言で言えませんが、全体として、colonial schools “植民大学”という機関は学習より人格、学識より信心、個人的に有利なことより市民への貢献を強調しました。

南北戦争の前まで

植民地時代のアメリカは圧倒的にプロテスタント派が多かったのです。それぞれの宗派が大学を作りましたが、その大学に入った学生はその宗派の信者とは限らないため、容認、寛容な態度が必要でした。それに金銭的な地盤が弱いので、ほとんどの大学は自分の宗派以外の学生の入学も許可しました。当時のカリキュラムは色々交えており、中世で学習された学問(グレコローマンの文学)やキリスト教に対する信心を深める学習とルネサンス後期の文学でした。全体的にそのカリキュラムを見れば、学生の意欲や好奇心を高めるよりも、大学のコースは絶対的な不変な真理で、学んで暗記しておく以外になり物でした。いまだ歴史の浅かったアメリカでは、教育に対して大きな問題がありました。というのは、今まで君主制 monarchy 下で出来た(言い換えれば貴族主義で出来た)高等教育の機関(大学)が、民主主義のアメリカで適応できるかどうかが問題でした。1829年に、とても面白い Yale Report と

いう学部生教育 undergraduate education に関するレポートが出ました。やはり、ヨーロッパの真似をする時代が終わらなければならないという声が強かったのです。『知的文化から学ぶ「得る」ものは二つある。「修練、訓練、規律：'discipline'」と「心／精神の‘家具’：'furniture' of the mind (心／精神の力を拡大すると同時に、その心／精神に知識‘家具’を備える…)』である。』^{※2} つまり目標は特に一つのプロフェッション「分野」にある物を教えるのではなく、むしろあらゆる分野に共通している基礎を築くことというものです。アメリカでのリベラル教育の種子がそのレポートにあるのではないかと考えられます。もちろん、反対の声も同じくらい強かったのです。「実用性」とか「有用」とか「有益」と言った言葉が当時のアメリカの開発時代には流行していました。

アメリカ植民地時代の反英闘争(1776～1783)では九つの大学がありましたが、南北戦争の前にその九つが250校に増えました!

19世紀の後半

南北戦争の後、南部にあったカレッジや大学は金銭的な地盤でも、建物／施設の面でも、学生数の面でも非常に貧弱で、すぐには復興できませんでしたが、アメリカの社会全体が宗教関係の仕事をするよりも、世間的な、物質的な社会を築こうとしました。すると、大学を再生する資金はアメリカの industrial entrepreneurs「産業企業家／事業家」、railroad tycoons「鉄道王／実業家」と business magnates「営業大家」が寄付しました。実業家の Andrew Carnagie はクラシック教育は無用だ、「今のままの大学教育ではビジネスの世界では、致命的である」と述べています。

そういう考え方に対して、1877年に、ウイスコンシン大学 University of Wisconsin のプログレッシブ・アイデア、the Wisconsin Idea が出来ました。^{※3}

※2) “...the Report declared, ‘The two great points to be gained in intellectual culture, are the *discipline* and the *furniture* of the mind; expanding its power, and storing it with knowledge.’” Jeremiah Day, *Yale Report*, published in “American Journal of Science and Arts,” 1829.

※3) “In the waning years of the nineteenth century, many Americans had grown alarmed over the vast concentrations of power, wealth, and privilege that unregulated laissez-faire capitalism had seemingly encouraged. Special interests, reformers believed, now posed a major threat to democratic ideals, especially to the principle of equality of opportunity. Monopolies and trusts were chiefly responsible for rampant political corruption, for the political machine, for the spread of urban slums and the shameless exploitation of immigrant labor. The cure for the nation’s ills, progressives announced, was still more democracy, the

20世紀の高等教育

中世の大学と20世紀の大学とのつながりは、非常に見えにくいものです。中世の後期に、文法、論理、修辞(又は弁証法)と *quadrivium* 算術、幾何学、音楽と天文学だけが守られてきたかもしれませんが、中世の大学には「学習のために学習する」とか「多芸多才の人間づくり」といった考え方が薄かったと言わざるを得ないのではいかと思います。(他方、近代の大学が次第に“プロフェッショナル”や“ボケーショナル”という方向付け、つまりキャリアや職業に使う学習を重んじれば、中世の大学教育に似ていると言えるかもしれません。少なくとも liberal education が大事だと思う教育者がそう思うのは良く理解できます。)

19世紀の終わりの大学は「選択科目制」を導入したり、「実務／実用的な科目を増やすなど、次々にクラシック教育から離れていきました。しかし20世紀の最初の40年間、それに対する反発もありました。つまり決まりきったカリキュラムから選択科目システムになってからは、却って「統一性のない／筋道が通っていない教育」になりました。大学の実験的な時代でした。クラシック教育に戻った大学もあり、半分ボケーショナルスクールになった大学もありました。四つの例を取り上げますと、1921年に Arthur E. Morgan氏が、アンティオク・カレッジ Antioch College で work-study プログラムを始めました。1932年に中階級の下の方の家庭の子女にアピールするために、ミネソタ州立大学がモチベーションやタレント(能力?)が欠けている学生に外国語のない、ラボラトリーのない、専門科目のないカリキュラムを作りました。(結局、1939年に20%の学生が working-class immigrant families になっていました。)それから、1934年にハイラムカレッジ Hiram College で、一つの科目だけを集中的に一学期か一年に勉強するカリキュラムを作るなど色々ありました。最後の例として、1930年にシカゴ大学 University of Chicago で、グレート・ブックスカリキュラムが出来ました。そ

の時のシカゴ大学のいわゆる General Education というのは、西洋文明に貢献した書物を読みながら、読書、執筆、思考、対話(discourse)能力を高め、数学も勉強することでした。

世界大戦後の高等教育

戦後からは、色々な大学の教育者は少数民族、特にネイティブ・アメリカ人や黒人や女性の事情に注目しました。次々に Black Studies、Native American Studies、Gender Studies のプログラムが出来ました。学生運動の影響が今でもあるのですが、今日はそれについて話しません。

リベラル教育とは何か

リベラル教育とは何か、残念ながら決定的な結論はありません。時代や社会情勢によって、それに人によって、リベラル教育の定義と解釈が変わります。今日、最後にシカゴ大学の「入学式」^{※4}の演説における、四人の考えを簡単にまとめたと思います。その四人は、Dr. John Mearsheimer 政治学者、Dr. Robert Pippin 哲学者、Professor Andrew Abbot 社会学者と Dr. Andrew Churcky 哲学者です。ミルシャイマー教授の演説によると“教育の目標”は、以下の三つです：批評思考を学ぶ、知識の範囲を広げる、自己認識を深める。それはそれで良いのですが、しかしミルシャイマーの上の三点についての説明をよく読むと、やはりクルーツキのコメントが当たっていると思います。というのは結局ミルシャイマーの論点には「市場価値」があるから、シカゴ大学で教育を受けるということでした。

ピッピンは、liberal education というのは realization of freedom だと言っています。そしてその liberal arts 感覚の反対は何かと言えば、偏見や独断的な態度を持つだけでなく、職業主義 vocationalism と、過剰な専門的学習や楽に生きるための技法も全部 liberal education の反対であると言っています。

preferential party primary, universal suffrage, the secret ballot, the initiative, and the referendum. Tighter legislative control over working conditions and better regulation of industries were called for. Improved schools, honesty in government, more social responsibility in the commercial sphere, a reversal of declining standards of public and private morality were all important elements comprising the progressive agenda.” C. J. Lucas, *American Higher Education—A History*, St. Martin’s Press, 1994, p. 175.

※4) 毎年シカゴ大学である教授が招待され、一年生に演説する事になっています。テーマも“教育の目標”に決まっているそうです。

恐ろしい事ですがピッピンの話によると、外国語や文学を専攻した学士よりも、新しい“protective services”という分野を専攻した学士が倍以上^{※5}になりました。また別な見地から見れば、1962年から1983年の間に外国語や文学を専攻した学生が58%、哲学を専攻した学生が60%、英語を専攻した学生が72%、数学を専攻にした学生が67%減りました！その間ビジネスを専攻した学生が87%増えました！

ピッピンに対してはクルーツキがかなり批判的で、やはりピッピンも最終的にリベラル教育が「市場価値」があると考えているようだと思っているのですが、私はそうは思いませんでした。

そしてアボット教授ですが、彼の演説は専攻と職業とは殆ど関係ないというものです。要するに、勉強する事は卒業後に、あまり関係ない、教育を受けないよりも受けた方が良くいとアボットは述べています。より良いと言うのは、卒業してから良い事があるからとか、良い事を得るからとかではなく、より良いから良いと言っています。ただそれだけです。

もう一つは、教育が将来のために目標があると言う考えが根本的に間違っています。何故かと言うと、その将来が来た時にもう既に、その世界は私たちが今学んでいる知識と根本的に違うからです。どんな分野を勉強しても、その分野に関する事実や概論や理論が常に変わりつつあります。

だからアボットの教育に関する結論は、「将来を考えるよりも、永続的な性質を持っている‘今’を考えるようになるでしょう…教育に将来の目標はありません。教育の重要な概念のすべてが、結局永続する今の自己に根ざしているようだ。」というものです。^{※6}

※5) はっきり、何年かと言っていませんが、話のコンテキストから見れば現在の事(2004～05年の間?)でしょう。つまり、例の9月11日以降の事。

※6) “We move from thinking about the future to thinking about an enduring quality of the present. In short, even when we argue in this theoretical style, we do not find that education has aims in the future. Any serious concept of education seems inevitably to root itself in a state of being that endures—one based in the perpetual present of the self.” Andrew Abbot, “The Aims of Education Address,” University of Chicago, 2003.

最後にクルーツキの演説です。「リベラル教育を正しく理解すれば、認識も、道徳も、感情も全部含まれています。道徳が必要なのは、お互いの平和的な存在を守るためです。」

クルーツキの話によると、ピッピンだけがリベラル教育のリベレーション the liberation of liberal education を強調したと述べています。但しクルーツキにとっては、ピッピンのリベレーションは狭すぎました。本当のリベレーションは the liberation from the forced competition of teachers for academic positions and of students for future jobs というリベレーションではないかというものです。つまり、資本主義環境の中の競争からのリベレーションです。最終的に、リベラル教育の目標は「人と人の間の生存競争」からの解放と述べたのです。^{※7}

最後に先ず、谷先生にお礼を申し上げたいと思います。そして、今日のFD Salonに来られた皆さんには謝らなければならないと思います。おそらく私の話がバラバラで、フォーカスがなくて、結論もなくて、時差ボケのギコチナイ私の日本語まで聞かされて申し訳ありません。それでも今後ともどうぞよろしくお願ひします。

Tom Wright's self image



※7) “The liberation that ultimately matters is the specific liberation from this forced competition of teachers for academic positions and of students for future jobs, which is simply an instance of the general competition for survival in the capitalist environment...By my lights, liberal education aims to rid us of the interpersonal competition for survival.” Andrew Chucky, “The Aim of Liberal Education,” University of Chicago, 2005.

FDサロンレポートとは

大学教育開発センターでは、教職員間の交流の場として、各種の教育活動の経験や意見が話し合えるように「FDサロン」を2002年10月から開催しています。

大学教育開発センター運営委員が、話題提供者をコーディネートし運営されています。話題提供者のお話に耳を傾け、お茶でも飲みながら自由に意見交換等が行える機会として定着してきました。しかし、開催時間や開催場所の問題から、参加ができないとの声も聞かれます。そのようなことから、FDサロンでの話題をもっと全学に環流させ、FDの取り組みを深めていくためにFDサロンレポートを発行することといたしました。

FDサロンレポート 05-1

発行日：2005年10月27日

発行：龍谷大学 大学教育開発センター

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

TEL. 075-645-2163 FAX. 075-645-2190

http://www.ryukoku.ac.jp/ffd